

## まえがき

三〇年ほど前、私が大学の自主ゼミナールで仲間とともに最初に学習したテキストは矢川徳光著『教育とはなにか』（新日本新書）でした。私が重症児の存在を意識しはじめたのは、この本によるところが大きいように思います。矢川先生からは障害の重い子どもたちを含め、障害児の発達と教育の意義について学ばせていただきました。そこで学んだことが本書に正しく継承・発展されているかどうか不安ですが、本書では、この間の療育実践の蓄積に基づく知見を紹介しつつ、関連する発達の基礎的概念・知識について述べました。保護者やこれから重症児とのかかわりをはじめようとする人に向けて書くことを意識し、やや解説的な記述が多くなりました。経歴豊富な先生方にはものたりないかもしれませんが、ご容赦ください。

重症児とのかかわりでは、なかなか通じあうことが困難な関係が続くことがあります。でも、どんな場合にも、周囲の人やものとの関係のなかでその子なりの思いを表現しているのだと思っ

て、その「自己実現」をたすける方向で寄り添っていくことが大切だと考えています。もちろん彼らの思いのすべてを理解できるわけではありませんが、この子は何かを伝えようとしているという気持ちでかかわりつづけたと思っています。また、他者に何かを伝えたいという気持ちや何かをしたいという気持ちは、個別のかかわりだけでなく、ともに学ぶ仲間の存在によってぐくまれることから、集団へのはたらきかけという観点からの授業づくりも大切にしていきたいものです。

同時に、社会的視点も大切です。重症児とかわっていると、社会の福祉や教育をめぐる政策動向に無関心ではられません。本書で触れますが、重症児療育の苦難の歴史にみるように、重症児の発達への取り組みは、必然的に社会のあり方を鋭く問うものにならざるを得ません。地域の社会的構成員として、地域のなかで、その子なりの社会参加を実現していくために、今、必要な教育的はたらきかけは何か、そして社会へのはたらきかけは何か、本書をたたき台として、学校、職場や地域の仲間とともに、あれこれ批評や議論をしながら読み進めていただければ、著者としてたいへんうれしく思います。

本書は、『みんなのねがい』の連載「重症児の発達の見方と指導」（二〇〇六年四月号～九月号）をもとに、大幅に加筆・修正を行い、再構成したものです。たった半年の連載でしたが、筆の遅い私は毎月締切りに追われ、ぎりぎりまで悩みつづけました。このため、連載中は編集部の見聞芳郎さんにたいへんご迷惑をおかけしました。しかし、こういう機会を与えられなければ、おそ

らく私の考えをまとめることもなかったと思います。単行本化するにあたっては、貴重なアドバイスをいただいた編集部の梅垣美香さんに感謝いたします。本書が多少とも読みやすいものになっていたら、梅垣さんのおかげだと思います。

重症児の発達と指導について、本書で取り上げることができなかったものも少なくありません。特に重症児の授業づくりについては多くの課題が残されています。今後、みなさんとともに考えていきたいと思えます。

二〇〇七年七月

— 全国障害者問題研究会第四一回大会（埼玉大会）を前に —

細渕 富夫